

2 「茨城県内における中世城館遺跡の考古学的検討」

土浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場 比毛君男

はじめに

本稿は、考古学の発掘調査成果から茨城県内の中世城館遺跡を概観することを目的とする。考古学では、断片となった道具・廃棄物・遺存体など動産的な遺物、土地に残る様々な痕跡で不動産的な遺構、両者を総合した遺跡が研究対象となる。本稿もその三点に留意して記述を進める^{註1}。

1 茨城県内における中世城館遺跡の傾向について

第一に、発掘調査件数は「南多北少」である。県央〔水戸〕地区以南、特に県南に事例が集中するこの事実は、実際に確認された遺跡分布数や地域的傾向、または旧常陸国内の中世当時の社会状況を反映したものではない。首都東京通勤圏地域に連動して開発が多いという、あくまでも現代社会を反映した開発や工事数の反映に過ぎない。

第二に、戦前は皇国史観に基づく南朝顕彰目的での史跡指定が目立つが、戦後は文化財保護行政の浸透と地域史研究の評価が進み、史跡に指定された城館遺跡の公園化・公有化が進んだ点である。これは更にまちづくりや地域おこしなどへの積極的な城館遺跡の利活用に通じ、つくば市小田城^{註2}や桜川市真壁城の史跡整備に顕著である。両者以外でも坂東市の逆井城、東海村の石神城、鹿嶋市の鹿島城、守谷市の守谷城、牛久市の小坂城、美浦村の木原城など県内各地に整備された城館は少なくない。

第三の点として、12世紀から13世紀前半にかけて、及び14世紀後半から15世紀前半に時期を限定できる調査事例が少ない。この時期はかわらけなど在地土器編年も明確さを欠いており、茨城県の中世考古学全体の課題でもある。しかしながら、それらを前後する時期や、長期間に営まれた遺跡の調査事例は蓄積が進んでおり、今後、これらの時期の資料が抽出され、中世考古学の資料全体が細分化し明確化してゆくことを期待したい。

2 城館遺跡の出土遺物について

当章では、県内における城館遺跡出土遺物のうち特徴のある資料について概観する。

(1) かわらけ

かわらけは土師質土器の皿または小皿で、中世では東北の一部を除き国内で最も普遍的にみられる土器である。儀式や宴会などで利用される飲食器のほか、燈明皿としての利用が知られる。中世城館遺跡では前者の利用が、鎌倉時代後期の方形居館跡のつくば市島名前野東遺跡から16世紀代の県内の各城まで、集中出土という状況〔かわらけ溜まり〕で確認される。廃棄された場所は曲輪内部の平坦面での出土もあるが、堀や溝の底面で一括廃棄された事例も多い（例：鹿島城 図 1-1）。鹿島城（図 1-2）や真壁城（図 1-3・4）などでは密教的な輪宝と梵字、文字・絵などを描いた皿が発見され、祭祀的な用途が想定される。

(2) 武具・馬具

県内各地の城館遺跡で、小札、鏃、刀装具、馬具などの部材が単体で出土する事例が見られる。図 1 では、行方市古屋敷遺跡（図 1-5～15）と同市玉造城（図 1-16）出土資料を挙げる。

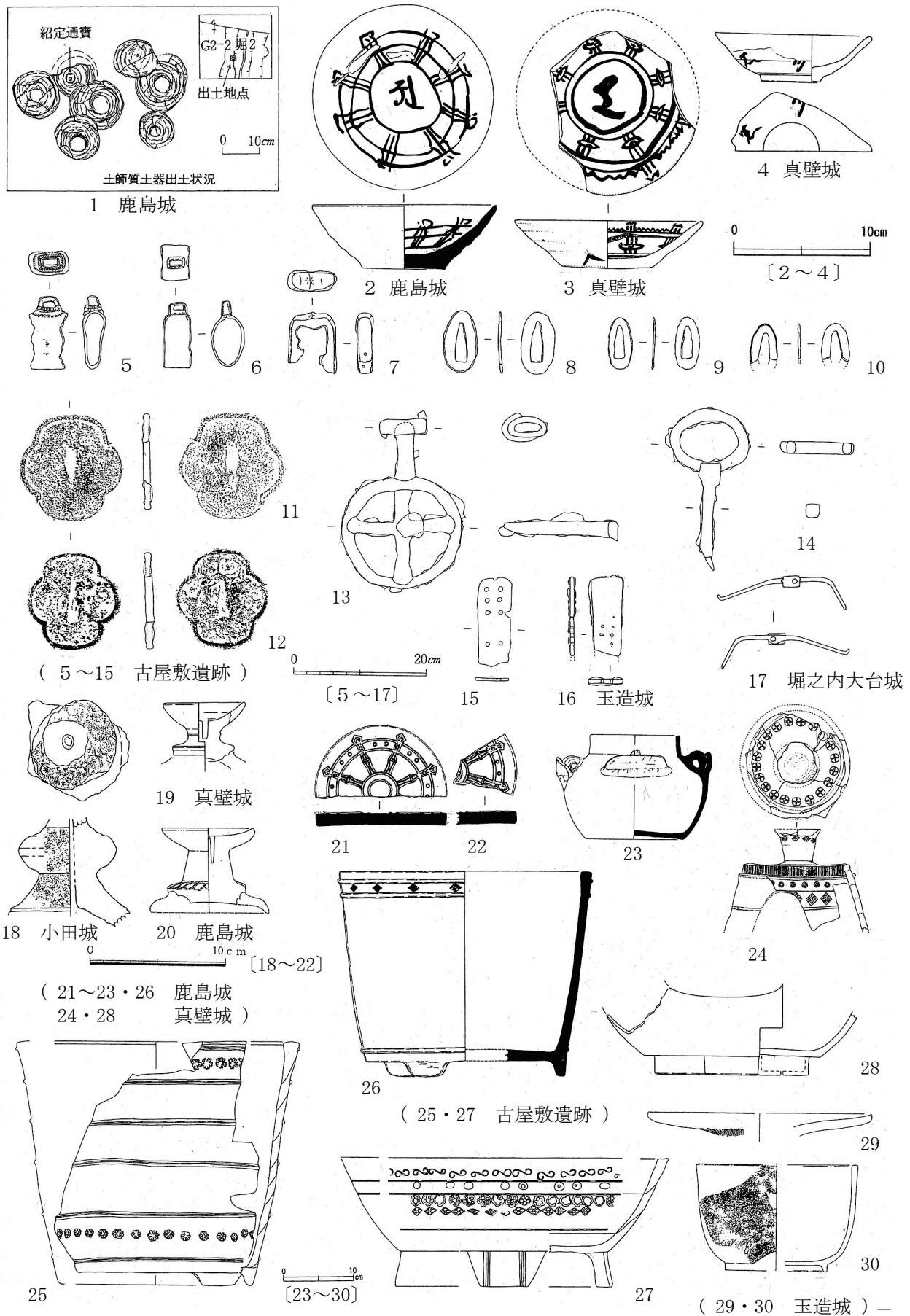


図1 城館遺跡の出土遺物 (1)

これらと対照的に中世の集落遺跡では、東海村村松白根遺跡など都市的な場が指摘される一部の遺跡を除いて、武具の出土はほとんど見られない。16世紀代に存続が確認される城館遺跡では、銅製・鉛製などの鉄砲玉の単体出土が見られ、行方市堀之内大台城では火縄銃の部材（図1-17）が出土している。

(3) 茶の湯関連資料

天目茶碗・茶入・茶壺〔古瀬戸、瀬戸美濃系大窯製品〕、安山岩製茶臼、瓦質土器の茶釜（鹿島城 図1-23）・風炉（真壁城 図1-28）が代表例で、中世後半（15～16世紀）以降に一般化する。中世の集落遺跡でもこれらが単独で出土する事例はあるが、セットとしての出土や同一種が複数個出土する事例は城館遺跡が多い。特に16世紀後半から17世紀初頭にかけて、換言すると戦国時代後半から織豊期の城館遺跡では、庭園や茶室遺構に伴い茶の湯関連の資料が出土している。

(4) 瓦質土器

瓦質土器は瓦のように表面に炭素を吸着させ黒く燻し、磨きをかけて丁寧に作られた土器である。金属製品や陶磁器など別素材で作られた器形を補完する目的で作られ、中世城館遺跡では風炉（真壁城 図1-28）、火鉢（古屋敷遺跡 図1-27）、深鉢（古屋敷遺跡 図1-25、鹿島城 図1-26、玉造城 図1-30）、燭台（小田城 図1-18、真壁城 図1-19・24、鹿島城 図1-20）、香炉、火舎などが目立つ。他方、輪宝土版（鹿島城 図1-21・22）や高杯（玉造城 図1-29）など特殊な用途が想定される器形もみられる。破片での出土がほとんどだが、鉾田市梶山城跡からは花瓶形の瓦質土器が完形で出土している^{註3}。中世も末期には、内耳鍋や挿鉢といった日常雑器も瓦質化の傾向がある。

(5) 銭

銭単独での出土は、城館・集落を問わず中世遺跡で普遍的に見られる。水戸市水戸城二の丸〔1,346枚出土、図2-1〕とかすみがうら市八田館〔2～3,000枚出土〕からは、15世紀の事例として大量に銭貨を埋納した古瀬戸灰釉瓶子の出土が確認されている。16世紀代の事例としては、鹿島城本丸や龍ヶ崎市屋代B遺跡の発掘調査で堀底から緞銭の状態数十枚の銭が出土している。城館遺跡内からの銭の出土は、富の蓄積と商行為の反映と考えられる。

(6) 貿易陶磁

龍泉窯系青磁蓮弁文碗に代表される宋・元代の青磁・白磁の碗皿類は、中世を通じて大量に国内に流通する。明代以降の青花は室町以降の城館遺跡に目立つ。特に有力氏族の居城や大規模な城館遺跡では、中国産陶磁器でも大型品や袋物類〔壺・香炉など〕が見られ、威信材としての陶磁器利用を確認できる。特につくば市小田城では、ベトナム産青花〔玉壺春瓶〕が出土している。

(7) 国産陶器

城館・集落といった種類を問わず、常陸の中世遺跡では鎌倉時代から南北朝時代にかけて貯蔵具としての常滑壺甕類、調理具での常滑片口鉢・古瀬戸灰釉卸皿、本来は液体などの容器を蔵骨器に転用した常滑玉縁口縁壺・古瀬戸灰釉四耳壺・瓶子、調度具や仏具として古瀬戸灰釉香炉などが見られる。室町以後は古瀬戸製品の日常雑器化と生産量の拡大で、城館遺跡を中心に灰釉平碗や折縁皿などの古瀬戸灰釉製品が更に大量に流通する。

なお、16世紀代には常陸国内で様々な器形の在地土器生産が活発化する。この時期爆発的に

普及する播鉢は、土師質・瓦質を問わず常陸では在地産土器が主体を占めるが、真壁城や美浦村木原城など地域の拠点的な城館遺跡には瀬戸美濃系鉄釉播鉢が一定量流入している。

(8) 有機質遺物

河川にのぞむ微高地上の城館遺跡は地下水位が高く、堀底などの保存条件が良好な事例〔つくば市小泉館や小田城など〕では、漆器碗や木製品など有機質の資料が発見される。台地上立地の城館でも水はけの条件などによっては木製品の出土がみられ、水戸市河和田城では木製の摺臼（図 2-2）などが出土し、那珂市宮田掃部助館では堀や柵列から柱根が確認されている。

米が炭化した塊の状態で出土した例は土浦市土浦城本丸土塁下層、焼米の出土は鹿島城本丸、日立市山尾城などでみられる。牛久市牛久城（明神遺跡）ではオオムギが塊で出土した。

(9) 信仰に関する遺物

真壁城からは銅製香炉の蓋（図 2-4）、念持仏として龍ヶ崎市長峰城では銅製地藏菩薩立像（図 2-6）、木原城からは金銅製菩薩立像がそれぞれ出土している。

(10) 戦闘行為の痕跡

戦闘行為を反映する出土状況も、遺存状態により稀に確認される。小美玉市取手山館（図 7-1）では、台地上に塹壕状に掘られた堀の内部とそれらを結ぶ土橋に鉄砲玉が集中して打ち込まれた状況が検出されたほか、下位の堀からは未成年の斬首された頭骨が出土した。更に花崗岩製石塔部材が数点出土し、鉄砲玉製作時の弾丸の磨きに転用されていた。天正 17 年（1589）に大掾氏方の城を江戸・佐竹連合軍が攻略した取手山の合戦を反映したものである。

稲敷市江戸崎城（古城西遺跡）では、昭和 60 年（1985）の電線工事中に地下約 3m 下から 20 体以上の人骨が出土した。男女・幼少年を問わず断首・据物切の上、短期間にバラバラの状態で埋葬したもので、付近には更に数十体以上の人骨の存在が推定されている。記録には残されていないが天正 18 年（1590）江戸崎城落城時の戦闘と推定されている。

小田城でも 59 次調査で、本丸東側の曲輪 2・4 間の堀跡から刃傷に比定される切断面を持つ頭蓋骨が出土しており、城で繰り広げられた戦闘によるものと推定される。

(11) その他

郡荘領主級以上の地域の拠点となる城からは、様々な資料が出土している。真壁城からは遊具としての碁石、サイコロ（図 2-3）、すごろくの駒、馬型の土製品（図 2-8）や泥仏（図 2-7）が、山尾城では商行為に用いる重りの「権」（図 2-5）が出土している。

3 城館遺跡内部の調査結果について

当章では、発掘調査で確認された城郭内の地点ごとの偏差や傾向などを指摘したい。ここでは独自の区分として、最重要地点を主郭部、主郭部の周辺に展開する部分を副郭部、主郭部に近接し地形上末端の部分を詰郭部、主郭部から離れた部分や城下集落を城郭外縁として扱う。

(1) 主郭部

主郭部の評価に留意すべき点として、現状は中世当時を直接反映するわけではなく、近現代も含め長期の変更が加えられた結果、最終的に遺存する姿であることを指摘したい。真壁城や鹿島城（図 5-1）では、16 世紀前半に現在の主郭内部に深い堀が築かれ、より細かい地割に主郭が分割されていた。真壁城では 16 世紀後半以降に埋め立てられ最終的な主郭の姿と現状がほぼ通じるが、鹿島城では承応年間（1652～55）に鹿島神宮周辺の寺社と町場の整理に伴い堀が

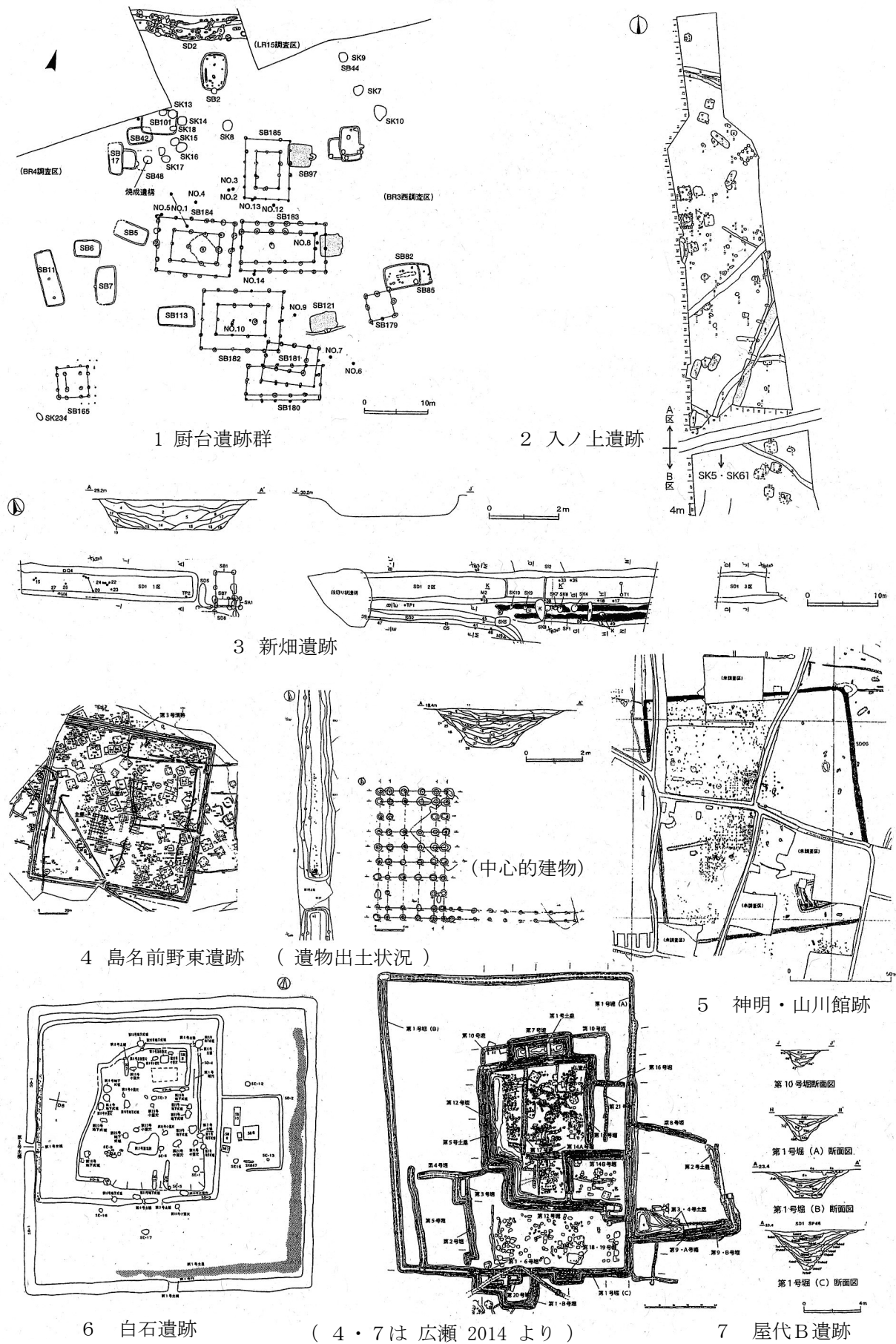


図3 茨城県内の城館遺跡(1)

埋め立てられた。

また、戦国期の小田城（図 4-1）や織豊期の堀之内大台城（図 7-2）では、主郭内部に庭園跡が発見されている。真壁城では主郭から離れ、同規模の重要性をもつ中城地区（図 4-4）で池や茶室の跡が確認されている。他方では全面広範囲に発掘調査された龍ヶ崎市屋代 B 遺跡、水戸市白石遺跡、更に小規模な方形館跡の調査では園地の跡は発見されていない。城の規模、城主の格、織豊期まで機能したか否かなど、庭園が発見される要因は複雑と思料される。

(2) 副郭部

主郭に隣接した副郭部には面積の広狭があるが、戦国期には現状の平坦面内に大規模な堀が築かれ異なる地割が存在したことが、牛久市牛久城（明神遺跡 図 5-4）・常陸太田市太田城の調査で分かっている。また小田城（図 4-1）・真壁城（図 4-3）では、主郭に近接した地区に方形区画が先行して存在したと想定されるが、戦国末期に大規模な改変を受け、平面形が大規模に変更された。16 世紀は土地利用の変化が激しく、当初生活の場が後に墓域に利用された例が真壁城・牛久城で確認される。主郭部同様に、副郭部も後代の影響に留意すべきと考える。

なお、15～16 世紀に盛行した地下室の遺構である地下式坑が、城館内部から調査検出されることがある。墓地遺跡では葬送に関する遺構と考えられているが、城館遺跡では重複が無く規則性をもって配列される場合があるため倉庫としての利用が想定されている。

(3) 詰郭部

地形上末端に位置する郭から、天目茶碗など茶の湯関連の器物や中国産陶磁器など比較的高価値の焼き物が出土する例が、木原城・常陸太田市山入城でみられる。前者は台地を堀で区切る城の先端にあたり^{註4}、後者は城の中心からやや離れた山頂部である。各々は城の構造上末端のため面積の狭小さが感じられるが、城内空間として象徴的な役割が担われた可能性がある。

(4) 城郭外縁

長期継続して営まれた城館遺跡の場合、当初は城に隣接した墓地を曲輪の拡張と共に取り込んだ事例がある。この結果、石塔の一部が墓地に近接する堀に廃棄される事例が屋代 B 遺跡や行方市玉造城などで確認される。石岡市片野城では、城の南東外郭部の家臣団集住地に比定される地区の調査で、中世末から近世初頭の短期間に集中して営まれた墓地の跡を発見した。

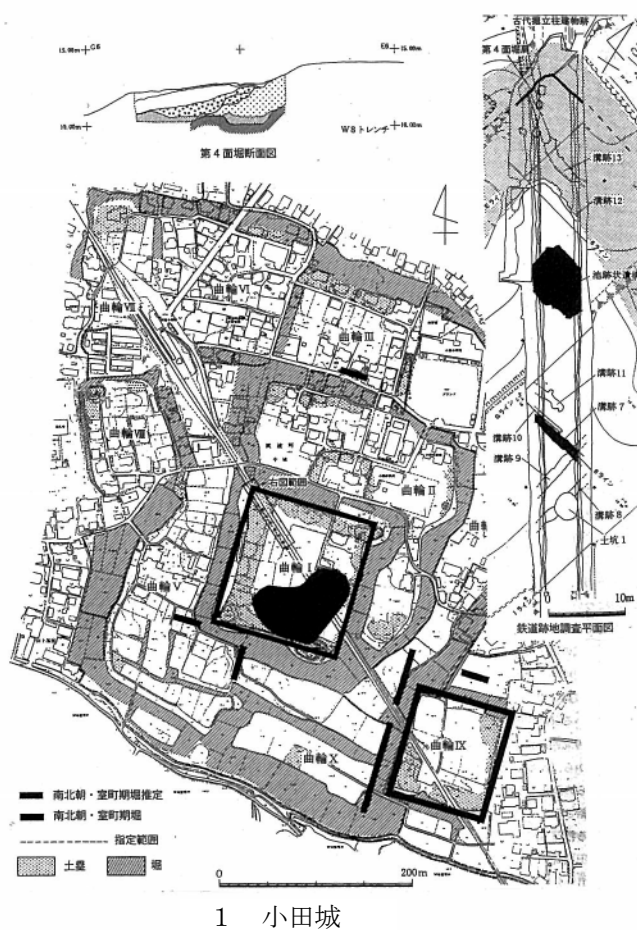
(5) 土塁

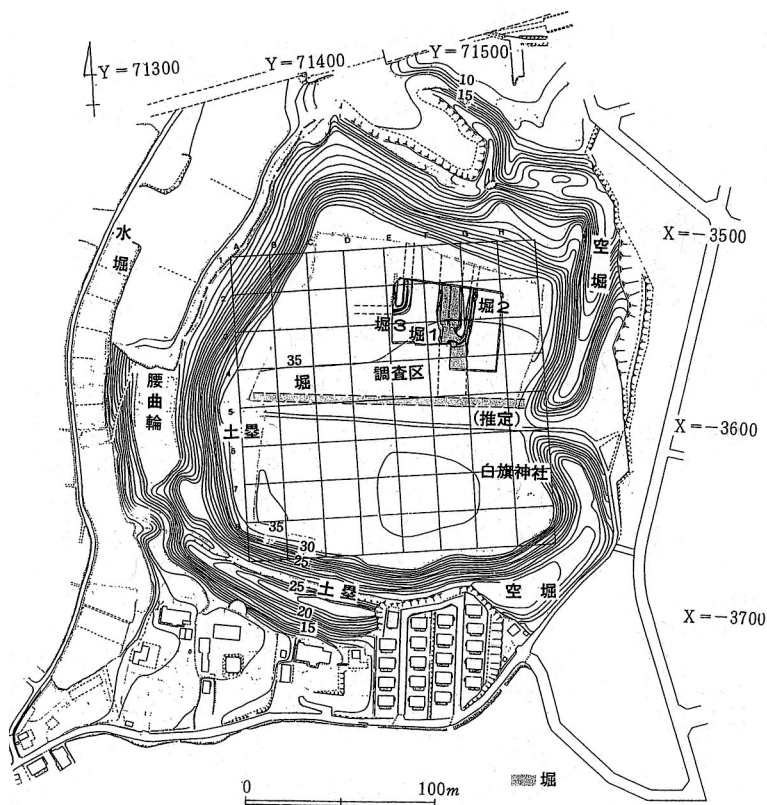
土塁は地上の構築物のため、地表に痕跡が残れば存在の可能性を想定できるが、後世に削平されると発掘調査では発見が難しい。現況では戦国期以後の土塁は残りやすいが、より古い時期の土塁には資料的制約がある。鎌倉期以後出現する方形館は溝のみを主体とし、土塁と堀がセットで検出されるのは 15 世紀以後の可能性が高いとの橋口定志の指摘がある（橋口 1990）。

戦国期の土塁を見る限り、台地上の遺跡ではロームなど台地の構成土を層状に積み上げながら叩きしめ、断面が互層を呈するものが多い。戦国後期の有力な城館遺跡では、造成当初の土塁を内部からかさ上げして、土塁の大規模化を図る事例が多く見られ、有事や惣構の形成など城の大規模化に対応した作事を行ったものと推測される（木原城 図 6-3、逆井城 図 5-3、土浦城本丸土塁など）。

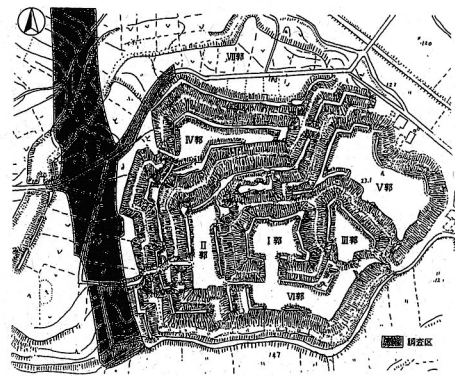
(6) 堀

中世を通じた城館遺跡の堀の規模・形態を考察した研究として、宇留野の論考がある（宇留野 2014）。宇留野の成果に立脚し県内の諸事例を回顧すると、12 世紀代の地域拠点的な遺跡で

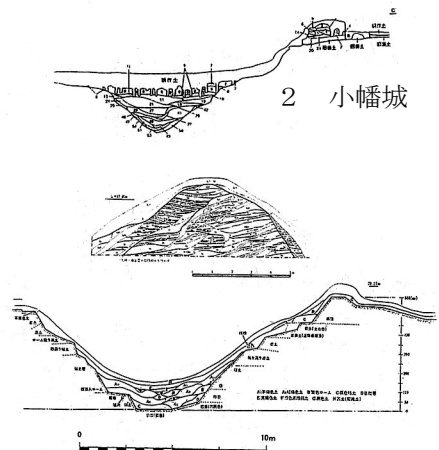




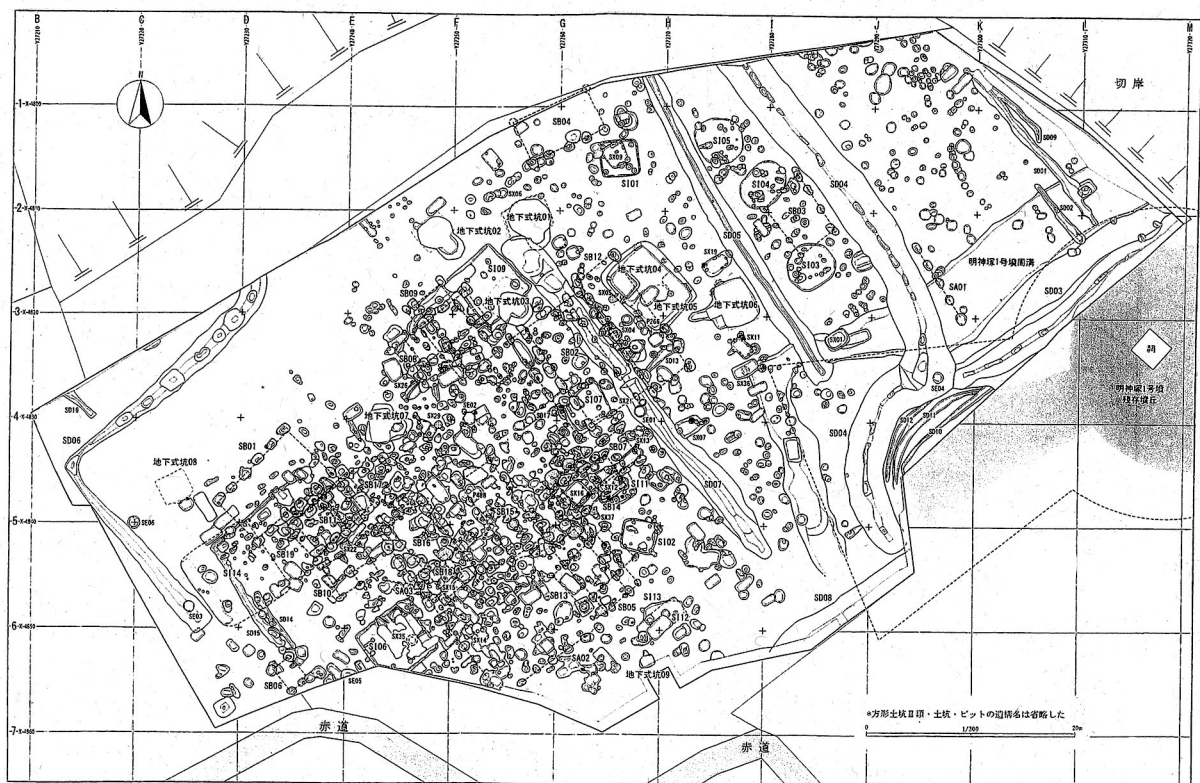
1 鹿島城



2 小幡城



3 逆井城



4 牛久城 (明神遺跡)

図5 茨城県内の城館遺跡 (3)

は、断面逆台形で底幅の広い溝が存在した。次いで鎌倉期の方形館跡でも溝の形態は類似するが、鎌倉期に発生し室町期に継続する屋代 B 遺跡（図 3-7）などでは断面薬研堀でやや大規模化した堀も見られるようになる。戦国期には堀の上幅が 10m 深さ 5m を超えるものが現れ、更に大規模化が進む。鉄砲伝来以降、主郭など重要部分には堀と土塁を合わせた幅が 20m を超える堀（小幡城 図 5-2、逆井城 図 5-3、石神城 図 6-4・5）が見られるが、近世には大筒など更に大規模な火器を意識して 40m 以上の堀幅を有する堀（水戸城三の丸 図 6-12）が出現する。戦国期に頻出する畝堀は、筑西市海老ヶ島城（図 6-1）、常総市菅生城（図 6-2）、小田城、真壁城、日立市原の内遺跡（11 次調査）などで発見されている。

(7) その他

城の伝承が無い遺跡の発掘調査で、偶然大規模な堀跡などが発見され城館の存在が判明する事例がある。茨城県奥谷遺跡、常陸大宮市石沢館跡、龍ヶ崎市外屋代遺跡などが該当し、発掘調査では大規模で屈曲のある堀や掘立柱建物跡などが確認されている。

城に類似する遺構として、日立市の大近平遺跡では「コ」の字状、鹿嶋市の文太長者屋敷跡では方形に巡る土塁が発見されている。前者は以前存在した八幡宮の跡で、後者は近世の霜水寺西堂跡（市指定史跡）である。長期間生育した樹根周辺は周囲に比べて土が盛り上がり、また小規模堂宇の寺院遺跡では垣根の意図として低い土塁をもつ場合があるため注意が必要である。概ねこれらの場合、内部にある建物跡と土塁の間隔が狭い傾向がある。

4 茨城県内城館遺跡の概観

茨城県内の城館遺跡については、広瀬が東関東の事例を通観した成果がある（広瀬 2014）。本章では広瀬の成果に依拠しながら、県内の城館遺跡を概観する。

(1) 12 世紀代の地域的拠点となる遺跡

明確に城館的な性格を有してはいないが、12 世紀代には地域的拠点と思しき遺跡が発見されている。鹿嶋市厨台遺跡群（図 3-1）では、溝の内部に掘立柱建物群と竪穴遺構がセットで発見された。土浦市入ノ上遺跡（図 3-2）でも三方に溝で囲まれた区画内部中央に掘立柱建物が、その周囲に竪穴遺構が配置されている。鹿嶋市新畑遺跡（図 3-3）では、幅 4 m 以上の直線状の堀の中に地山を掘り残した土橋を設け、その上に門と思しき建物が発見されている。

(2) 鎌倉期（13～14 世紀前半）の方形館跡

13 世紀から 14 世紀前半頃にかけて、1 町（約 108m）を単位とした堀または溝を方形に巡らせ、内部に掘立柱建物を配した館跡の遺跡が確認されている。つくば市島名前野東遺跡（図 3-4）、土浦市神明・山川館（図 3-5）が代表例で、中央には中心的な施設となる根石をもつ掘立柱建物が配置されている。根石建物の周囲には掘立柱建物が複数存在し、方形竪穴や井戸などもみられる。堀に接した部分は空間が多く、建物などは配置されない傾向がある。

(3) 室町期（15～16 世紀）：大規模領主級（守護・郡荘領主級の支配領域）の城館遺跡

南北朝期の城館は湖沼や山地など自然地形を巧みに利用したものが多い。関城、大宝城、瓜連城などの発掘調査では、概期よりも室町時代以降に年代が下る遺構が確認されている。

守護級の城館遺跡では、小田城の成果が代表例である。方形の曲輪を主郭とし、その周辺に複数の曲輪を配置する。後代の影響で不明な点もあるが、近接する曲輪も方形を基調としていた可能性がある。室町幕府の本拠たる室町殿の影響を受け、園地を有する事例が発見されるの

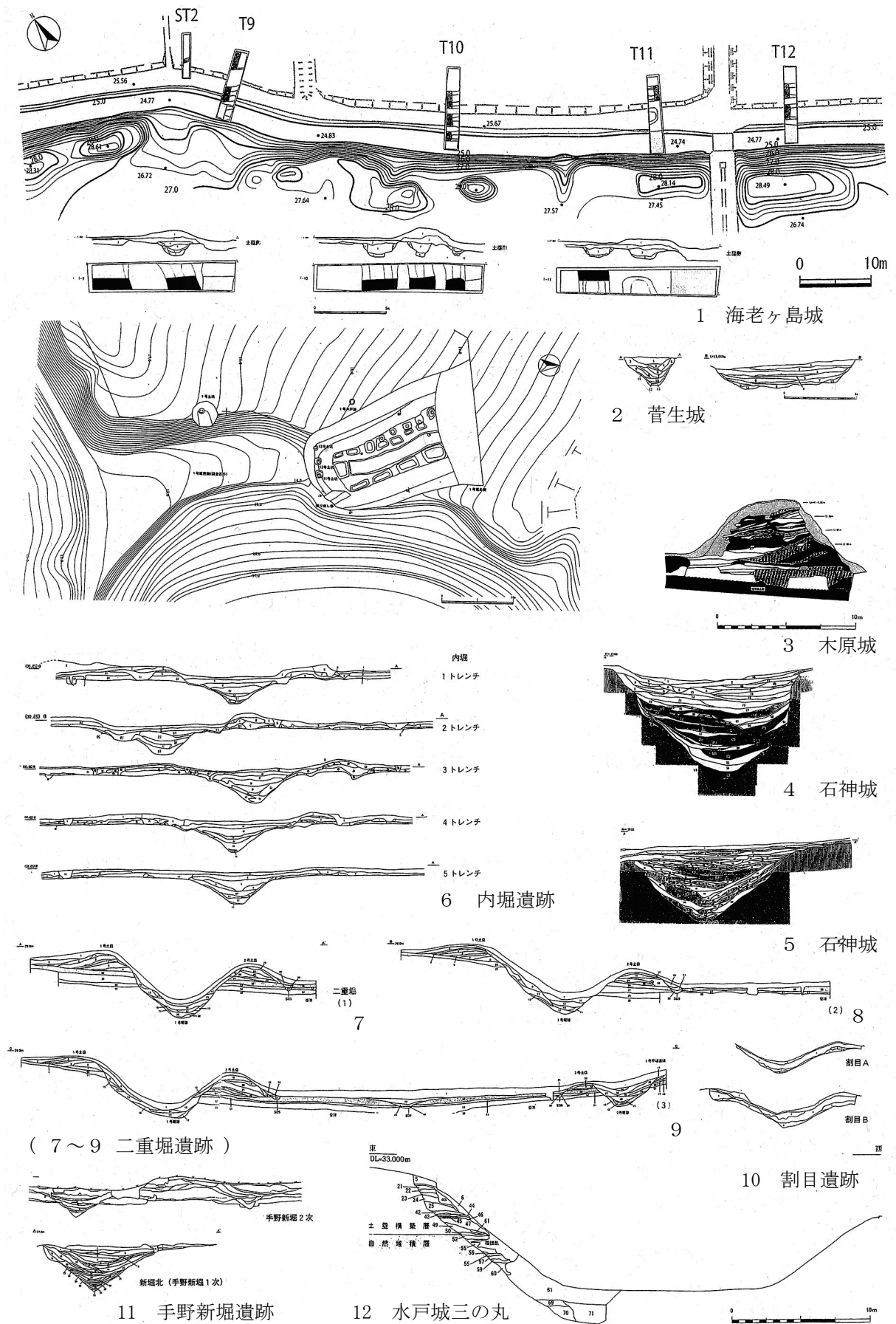


図6 茨城県内の城館遺跡 (4)

も守護級の館である。

佐竹氏の有力一族の山入氏の居城山入城は丘陵頂部に居館をおく。守護代小野崎氏分家の山尾城も同様の立地だが、県北部は平野が少なく阿武隈山地や八溝山地起因の丘陵が多い地理的特徴の反映と考えられる。この他守護代・郡荘領主級の城館遺跡には、石神城（図 6-4・5）、鹿島城（図 5-1）、玉造城などがある。これらの多くは、台地上の縁辺部に深い堀を築いて曲輪の区割りをを行い、端部近くに主郭、外縁部に集落を配している。

結城氏関連の城館として、結城市城の内遺跡には現在も方形に土塁と堀を巡らせた痕跡が残る。発掘調査の結果、内部にはこれを遡る時期の堀跡があり、結城合戦（1441 年）以前の居館跡と重複して時期差を経て土塁をもつ方形館が構築されたことが分かった。

(4) 室町期：小規模領主級（複数の大字単位の支配領域）の城館遺跡

水戸市白石遺跡（図 3-6）、龍ヶ崎市屋代 B 遺跡（図 3-7）は曲輪全面が発掘調査された県内でも代表的な事例である。鎌倉時代後半に不整形の溝が巡る館を基本とするが、室町期に本格的な方形館を形成し、室町後期には土塁や馬出状の施設を有し、城全体が大規模化する。牛久市小坂城（図 4-2）も規模は異なるが、台地端部の主郭を中心に副郭が外側に付属する。

那珂市高野氏館は小規模な方形館で主郭内の大部分が調査されているが、遺物量は少ない。台地端部を区切る形態の城では、行方市古屋敷遺跡と市鴨山城で主郭が全面調査されている。前者は遺物量が豊富だが、後者では内耳土器が目立つほかその他の遺物は少ない。

この他、剣豪塚原ト伝にちなむ鹿嶋市塚原館でも数度の確認調査が行われている。

(5) 戦闘に特化した城跡

小美玉市取手山館（図 7-1）は霞ヶ浦に臨む台地頂部にあり、台地上には弧を描くように塹壕状に掘られた堀が確認された。鉄砲を用いた本格的な戦闘のために造営されたと思料され、天正 17 年（1589）に大掾氏対江戸・佐竹氏により行われた取手山の合戦の地である。

(6) 街道遮蔽施設

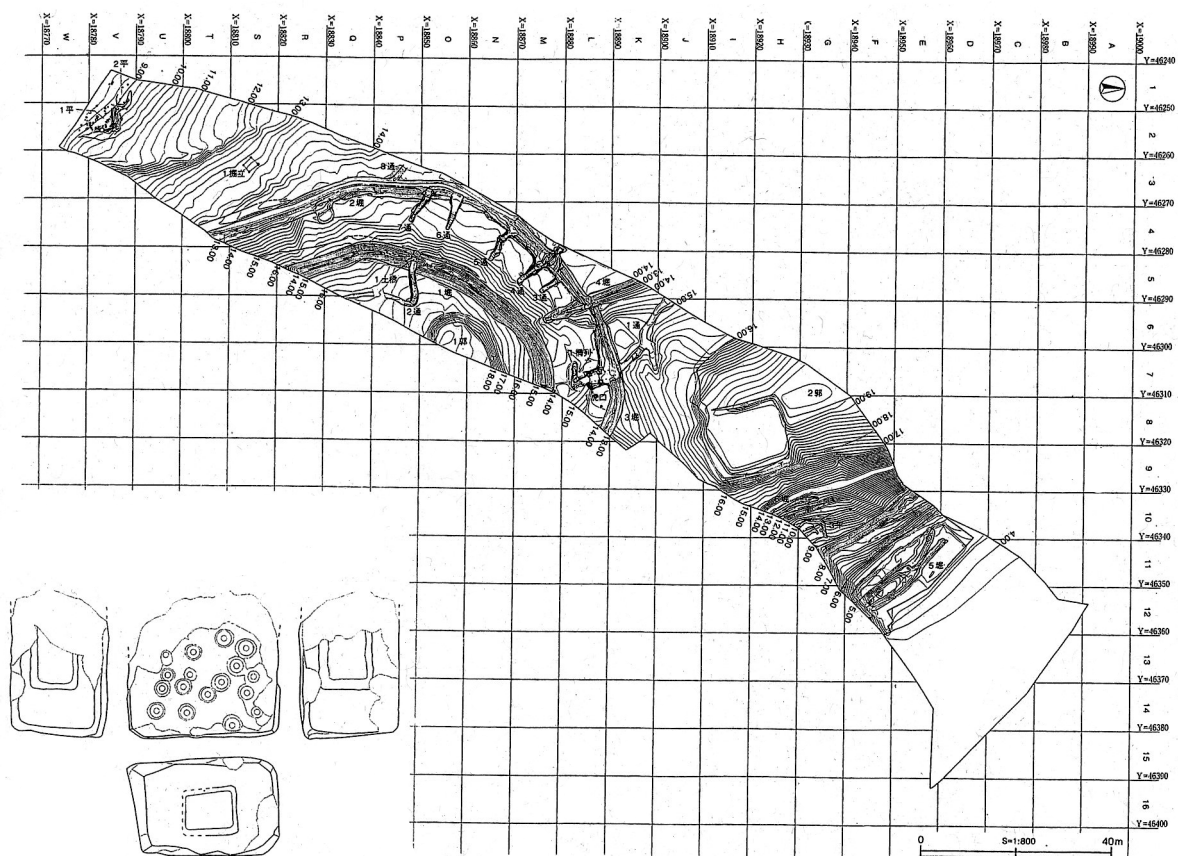
県内各地で、古道に直行する位置で設置された一定規模の土塁と堀が発見されている。稲敷市二重堀遺跡（図 6-7～9）、土浦市手野新堀遺跡（図 6-11）、つくば市柴崎大堀遺跡、阿見町内堀遺跡（図 6-6）・割目遺跡（図 6-10）など複数の発掘調査事例がある。街道に近い位置では大規模に、末端に従い小規模化する傾向があり、土塁と堀は 1 条が多いが、二重堀遺跡では間に平坦面をもつ 2 条の土塁と堀が確認されている。

(7) 境目の城

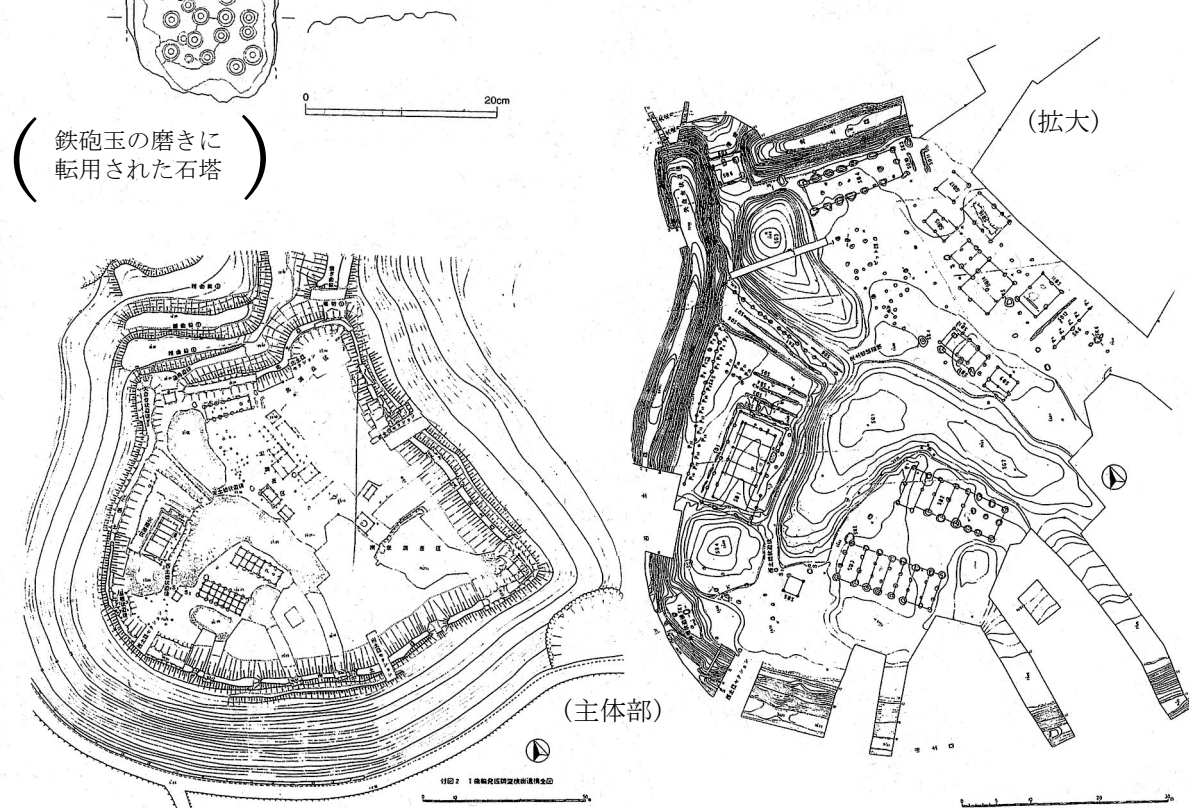
戦国時代後半に至ると築城技術の進歩と戦国大名の領国間紛争の激化に伴い、勢力の境界部分に前線基地として大規模な城が構築された。発掘調査された代表例には、後北条氏方の対佐竹氏方への最前線として牛久城（明神遺跡 図 5-4）・逆井城（図 5-3）が、土岐氏の小田領との境界に木原城（図 6-3）、江戸氏の南方進出基地として小幡城（図 5-2）が挙げられる。これらの多くは、城下集落を包摂する大規模な堀と土塁などの防御施設〔惣構〕を城の最縁辺部に造営し、主郭周囲か城内に根小屋の地名を有するものが多い。堀や土塁も鉄砲を意識し、前代よりも大規模化している。

(8) 織豊城郭の諸特徴について

全国に展開された織豊期の城館の大きな特徴として、石垣の構築、礎石建物、瓦葺建物の存在が指摘されている。茨城県内における戦国末期から織豊期に整備された城館遺跡では、土塁



1 取手山館



2 堀之内大台城

図7 茨城県内の城館遺跡(5)

や門付近に石積を部分的に構築した事例が確認されている。小田城では本丸南側の虎口に石積が施され、石の一部には石塔部材や石造地藏像が転用されていた（図 2-11・12）。潮来市島崎城では、本丸土塁の裾の一部に石塔部材を数段積み重ねた遺構が発見された。これ以前に存続した県内の城館遺跡では石塔部材を城の施設に再利用した事例はほとんど見られず、織豊期に諸勢力を駆逐して常陸国内を統一支配した佐竹氏が以前の在地支配者を否定する意味で、石塔を用いた城の整備を行ったと解釈されている（比毛 2019）。

またこの時期、主郭または中心的な曲輪に建物建築とセットで池や置石、樹木などを配した庭園遺構が確認される。調査例では堀ノ内大台城（図 7-2）、小田城（図 4-1）、真壁城（図 4-4）などで類例が指摘できる。

なお現在の姿は近世城郭だが、笠間市笠間城は県内で唯一本格的な石垣を持つ城である。織豊末期に豊臣系大名の蒲生氏が城主の時期もあり、石垣構築の時期が課題となっている。

礎石建物は、潮来市堀之内大台城の主郭の最も中心的な建物で確認されている（図 2-13）。この礎石は宝篋印塔基礎や五輪塔地輪などの石塔部材を転用したもので、本来は 15～16 世紀代の銚子砂岩製石塔の一部であった。上記石積遺構と同様、旧領主の島崎氏の石塔を支配者が佐竹氏に代わり、礎石に転用したと理解される。小田城や真壁城などでも部分的に礎石が遺存するが、遺構の重複が激しく建物復元が可能な点数ではない。なお、龍ヶ崎市長峰城の中心的曲輪Ⅰ郭の虎口で、推定 6 点の礎石立ちの門の跡が 16 世紀代として報告されている。

織豊期の瓦は茨城県内では未確認である。江戸期では佐竹氏秋田移封後の秋田氏治下の宍戸城のほか、土浦城、水戸城などで 17 世紀代の瓦が確認されている。また、小田城本丸からは室町期の 3 面から一定量の中世瓦（図 2-9・10）が出土しており、城の主郭内に格の高い蓼棟建物、または当主の持仏堂が存在した可能性が想定される。

おわりに　－廃城後の状況について－

小規模領主級の城館遺跡の場合、江戸期〔特に 17 世紀〕に信仰の対象として城が再利用されることがある。この場合、塚の造営・石塔建立・奉斎銭の出土など（土浦市右衛門館、行方市古屋敷遺跡など）がみられ、城主の末裔や伝承を受け継ぐ人々の想いの反映と考えられる。

18 世紀以後には、新田開発や集落移転などによって城跡内部に複数の屋敷地が形成される事例も確認される（屋代 B 遺跡）。報告書の記述に遺構外出土遺物に 18 世紀以後の肥前系陶磁器や寛永通宝など銭貨の出土がみられるが、これらも近世後半に人の手が加わった影響の反映かもしれない。近現代以降は、流通網や交通の整備、人口増加や各種産業の振興、国内開発の増加など様々な要因で、より大規模に日本の国土全体に様々な手が加えられることとなった。

最後に、過去からの継続による不可逆的な影響を受け続けながらも、現在まで伝えられてきた城がもつ様々な歴史と遺産を、当調査に携わった我々も今後何らかの形で次の世代に伝えていきたいと思う。

註

註 1　以下、挿図中の各図の出典は指示されたものを除いて各発掘調査報告書に拠る。引用文献からは発掘調査報告書を省く。

註 2　以下、初出のみ城名の前に市町村名を挙げる。また、遺跡名以外は「〇〇城」と記述し、

跡は付けない。

註3 銚田市大洋公民館所蔵。展示室にて筆者実見する。

註4 発掘調査報告書では本丸として報告されているが、標高が隣接する曲輪よりも低く面積も狭いため、この節で取り扱う。

引用・参考文献（敬称略、50音順）

茨城中世考古学研究会 2005「茨城県の中世居館」『茨城県考古学協会誌』第17号 茨城県考古学協会

宇留野主税 2010「中世城館研究の現状」『婆良岐考古』第32号 婆良岐考古同人会

宇留野主税 2014「堀・堀内障壁（障子堀）」『中世城館の考古学』（萩原三雄・中井均編集、高志書院）所収

橋口定志 1990「中世東国の居館とその周辺-南関東におけるいくつかの発掘調査事例から-」『日本史研究』330 日本史研究会

比毛君男 2019「中世武家墓の伝来について」『論集 葬送・墓・石塔 狭川真一さん還暦記念論文集』（狭川真一さん還暦記念会編集発行）所収

広瀬季一郎 2014「南北朝・室町期の城館-東関東地域を中心に-」『中世城館の考古学』（萩原三雄・中井均編集、高志書院）所収